

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

シンポジウム「コンピュータ民族学への道」 (特別研究メモ)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005854

シンポジウム

「コンピュータ民族学への道」

久保 正敏

一 はじめに

一九七七年以降毎年開かれてきた谷口財団民族学部門国際シンポジウムも回を重ね、通算第八回目のシンポジウムが一九八四年九月一六日〜二三日にわたり、民博及び琵琶湖畔求是荘で開催された。「コンピュータ民族学への道」をテーマとする今回のシンポジウムは、民博設立時に新しく開拓すべき研究部門として設けられたコンピュータ民族学のこの間の成果を整理し、関連する分野で研究を進めている内外研究者との討論を通じてこれからの方向づけを明確にすることを主なねらいとしたものである。ただし、このシンポジウムは、民族学のみでなく広く人文科学全般も視野に含んでいる。参加者は、アメリカ、イギリス、西ドイツ、ノルウェーから招かれた人文科学研究へのコンピュータ応用研究を進めている四名の研究者、国内からは民博においてコンピュータ民族

学にかかわってきた五名の研究者、計九名であった。シンポジウムは、まず民博の杉田氏及び長年コンピュータ・アンド・ヒューマニティズ誌の編集長をつとめてきたアメリカのラーベン氏両氏による基調報告、続いて各参加者の研究紹介や問題提起、最後に総括討論という形で進められ、その間に、ニューメディア機器の工場見学や共同研究「人文科学研究におけるコンピュータ利用」とのジョイントセッションなども含む盛りだくさんの内容であった。その成果はいずれまともて *Semi Ethnological Studies* に公表される予定であるが、本稿では、とりあえず今回のシンポジウムの趣旨、討議内容について概略報告を行なう。

二 コンピュータ民族学をめざす道——基調報告から

コンピュータ民族学は、情報科学を道具とする民族学と位置づけられ設置された研究部門であるが、当初はそれほど明確な定義がなされていたわけではない。しかし、ここ数年の民族学研究におけるデータ処理経験を通して、コンピュータと民族学との接点がおぼろげながら明らかになってきたと言える。杉田氏の基調報告によれば、コンピュータと民族学との関係は次の三点にまとめられるであろう。

(一) 民族学研究の道具としてのコンピュータ

情報検索、統計処理、画像処理、音響処理など、すでに開発されてきた情報処理技術を民族学研究に利用するもので、コンピュータ民族学の出発点がこれであった。

利用技術、可能性など今後、更に充分な研究が進められるべきであり、その中から、道具として使いやすいコンピュータシステムはどのようなハードウェア、ソフトウェアを備えるべきかという、ひとり民族学のみにかかわらない重要なテーマも浮かび上がってくる。

(二) 民族学研究の方法論としてのコンピュータ

これは、コンピュータ的発想に基づく新しい民族学研究方法論、すなわち、観察や比較に基づいてポトムアップに進める伝統的な方法論にかわり、まず社会構造や現象を説明するモデルを構成し、それをコンピュータでシミュレートした結果をモデル構造にフィードバックさせながら現実に適合したモデルを組みあげる過程を通して対象をよりよく理解するというトップダウン的な方法論を開拓するものである。この両者の方法論をうまく結合すれば民族学研究の一層の発展が期待できるのではないだろうか。

(三) 民族学研究の対象としてのコンピュータ

コンピュータの発展、利用に関わる民族性の比較研究

を行なうもので、コンピュータシステムの導入に際して社会がどう反応し、どう影響を受けるかという視点で民族性、国民性を比較し、そこから対象となる社会構造の理解を深めようとするものである。この研究は、やがてもっと広範な、物質文化、科学技術という断面から見た人間社会の研究へと発展していくであろう。

杉田氏による右のような基調報告に続き、ラーベン氏の基調報告では、民族学研究が対象とする多様、多次元の情報をコンピュータにどのようにカテゴリー化して入力し、データベース化するべきかという問題に対し、連想、推論といった人工知能研究からのアプローチが必要であるとの指摘があった。

三 人文科学研究への様々なコンピュータ利用

基調報告に続いて各参加者の発表が行なわれた。海外の参加者からは、バーナード氏による、博物館収蔵品のデータベース構築において収蔵品の持つ種々の属性間の関係を表現する手法についての報告、リーガー氏による、文献中の語彙の出現頻度から語彙間の類似度を算出する計算言語学的手法の紹介と人工知能研究への適用可能性についての報告、ハウゲ氏による、ノルウェーにおける考古学、歴史学の文献データベース開発等のコンビ

ユータを利用した人文科学研究の紹介、など主に言語処理や文字処理を中心にしたコンピュータ利用研究が報告された。

国内からは、江口氏による、民族学研究者と情報科学研究者による共同研究体制の重要性の指摘、八村氏による、人文科学研究における画像処理の重要性の指摘とその数々の研究成果の報告、久保による、民族学における映像情報データベースや良好なマン・マシン・インタフェースの必要性の指摘、山本氏による、民族学研究者にとって使いやすいプログラミングシステムはどうあるべきかという問題提起がそれぞれ行なわれた。

海外からの発表がどちらかといえば純情報科学寄りの内容であったのに比べ、国内からの発表は人文科学研究者とコンピュータとのより良い関係を考える視点が明確であったように思われる。

四 総括討論とまとめ

最終日には、梅棹館長もまじえて総括討論が行なわれ、多様な民族学情報のデータベース化の難しさ、日本語処理の難しさといった実際の問題の討議の中から、コンピュータを使ったロボットや教育機器などの導入を際際しての西欧人と日本人の態度の違いなども指摘され、前

に(三)で述べた民族学研究の対象としてのコンピュータというおもしろい議論に及びかけたが、時間の制約で不十分に終わったのは残念であった。

ラーベン氏が最後にこれらをまとめて、今後とも人文科学研究者と情報科学研究者との国際的な共同討議、共同研究が必要であり、二者の境界領域であるコンピュータ民族学には、めざましいコンピュータ化の進展が人間生活へ及ぼす影響を考えていく責任があるとの重要な指摘があった。

かくして一週間にわたるシンポジウムは、ほぼ所期の目的を果たして閉幕した。今回のシンポジウムでの様々の議論が、生まれて間もないコンピュータ民族学を進展させてゆくうえで大きなステップになるであろうことは疑いない。我々は、基調報告で明らかにされた三つの視点のうち、まず(一)によってコンピュータ民族学の基礎を確立し、(二)、(三)によって本格的な民族学へと昇華させてゆく必要がある。

最後に、シンポジウムの準備、運営に多大な労を割いていただいた谷口財団、千里文化財団、組織委員会、実行委員会の関係諸氏にあつくお礼を申しあげる次第である。

〔特別研究メモ〕

シンポジウムの発表者とテーマ

月 日	発 表 者	テ ー マ
1984年		
9月17日	司会・岩田慶治(民博) 梅棹忠夫(民博)	開会の辞
	<1> 座長・岩田慶治(民博) (基調報告) 杉田繁治(民博)	民族学研究におけるコンピュータ —道具および対象として
	ジョセフ・ラーベン (パラダイム・プレス)	コンピュータ民族学 —人文科学からの視点
9月18日	<2> 座長・ジョスタイン・ハウゲ (人文科学データ・センター) 八村廣三郎(京都大学)	人文科学における画像処理とコンピ ュータ・グラフィックス
	<3> 座長・杉田繁治(民博)	共同討議
9月19日	<4> 座長・バーガード・リーガー (ドイツ技術大学) 久保正敏(民博)	民族学研究における映像情報検索シ ステム
9月21日	<5> 座長・ルー・バーナード (オックスフォード大学) 江口一久(民博)	フィールドワーカーとコンピ ュータ —エンドユーザから見たコンピ ュータ 民族学
	<6> 座長・久保正敏(民博) ルー・バーナード (オックスフォード大学)	知識ベースかデータベースか? —民族学におけるコンピュータの応用
	<7> 座長・山本泰則(民博) バーガード・リーガー (ドイツ技術大学)	知識表現から見たコンピュータ言語学 と文字情報処理 —その発展・現状・将来像
9月22日	<8> 座長・八村廣三郎(京都大学) ジョスタイン・ハウゲ (人文科学データ・センター)	ノルウェーの人文科学におけるコンピ ュータ利用 —その過去と未来の展望
	<9> 座長・ルー・バーナード (オックスフォード大学) 山本泰則(民博)	民族学者とプログラミング
9月23日	<10> 座長・ジョセフ・ラーベン (パラダイム・プレス)	総括討論